歴史を刻む「五臓円ビル」（上）

改修前、屋上に5本の蛇腹

3階レストラン 外部テラスも

鳥取の街の中ほどに位置する五臓円ビル（鳥取市二階町）の存在を、ある意識を持って見つめることになったのは昭和四十八（一九七三）年の春、広島から故郷の鳥取へ帰ってきた年、今から三十五年も前にさかのぼる。さまざまな色を織り込んだ外壁のスクラッチタイルと、屋上に突き出る形で水平に刻まれた三本と二本の蛇腹の存在感に圧倒された。

見るからに長い歴史を背負いながら、縦長のスチール窓や二丁掛けタイル、そして入り口上の唐草模様をあしらった看板等、「洋」を感じさせる。ちょうど石油危機の年と重なり、頼る人も物もなく、これからの自分の行く末を見透かされているような視線を感じた記憶が残っている。

その後、二十年ほどたって智頭街道を車で走っていた時、妙な感じの建物が目に映った。一瞬、通りを間違ったかと思ったほどであった。後で聞いたところによると、外壁のタイルのかけらが落ち、危険を察知した主人がすぐに地元の建築会社に連絡。タイルの浮きを調べ、一部を剥がしてモルタル刷毛引きとした。

この時、屋上に突き出た五本の蛇腹は取り除かれ、外壁全体に砂状の吹き付け材が塗装されてしまった。後になって石尾博久氏におしかりを受けることになったが、人命にかかわることなのでどうすることもできなかったようである。

昨年、Tさんの紹介で五臓円薬局の主人にお会いして、初めてじっくりと建物を見させていただいた。聞けば、図面らしきものは何も残っていないらしい。そして、築七十七年という長い年月を耐え抜いた建築の生きざまをこの目で見て、そして、この手で触りながら階段を登った。

二階そして三階、屋上へと上がるにつれて、雨漏りや外壁からの浸透した水が止められなくて内部に染み込み、特に三階の隅の洋間（旧レストラン）がひどく痛んでいた。外回りの梁筋が一部裂け、コンクリートや中塗りの石灰が壁際に落ち、床のじゅうたんには水や湿気が染み込み、乾く間がないくらいだ。クラックが入った壁のプラスターには緑色のカビが黒色に変色している。

これらの状況を考えると、この建物についての構造的診断をできるだけ早く行い、安全を確かめる必要があると強く感じた。それにしても、階段の手すりに埋め込まれた「三心五蔵」と「森下」をかたどった特製の鋳鉄製飾り金物やその空間の豊かさをはじめ、洋室の高い天井の縁に引かれた蛇腹の表情、そして、縦長の窓から入るやわらかな光に包まれる空間は、ながい時の流れを一層感じさせる。

三階のレストラン（ソーダファウンテン）は当時、高級レストランとして繁盛し、なんと、開店して半年後には外部テラスに木造で増築し、昭和十九年の終戦間際まで営業するほどであったという。

（木下建築研究所・木下正昭）

1931年の建築当時の面影を残す五臓円ビル（上）と97年に外壁などが改修された現在の五臓円ビル

歴史を刻む「五臓円ビル」（下）

2つの大災害乗り切る

智頭街道活性化に次世代へ重要資産

五臓円ビルは築七十七年の間に二回の大災害を経験している。昭和十八年の鳥取大震災と、昭和二十七年の鳥取大火である。

記録によると震度6、マグニチュード7・4の直下型地震においても薬ビンが三本ほど床に落ちただけという。鉄筋コンクリートの高い耐震性を実証するものであり、壁の亀裂一つ見られぬ堅牢さであった。第二次世界大戦のさなか、食料や物資も乏しく、復興には相当の困難も要したと思われる。

ようやく復興の兆しが見えてきた昭和二十七年には、鳥取大火に遭遇することになる。市街地が約十二時間燃え続け、その大半が焦土と化した。焼け野原に五臓円ビルは神秘のように真っ黒く立っていた。その姿は多くの市民の目に焼きつくことになる。

大火後、復興都市計画で智頭街道の拡幅がなされ、行政から解体を求められたが、京大建築学科の棚橋教授が調査の結果、「躯体強度に問題はない」との結論を得て解体を免れた。これら二つの大災害を乗り切るたびに五臓円ビルは大地震、大火災の記憶をとどめる建築物として、今も市民の心に残り続けている。

大火後約五十六年ほどが過ぎようとする今、この五臓円ビルは三回目の危機に直面している。近代建築の多くは軒を無くし、パラペットを立ち上げること（陸屋根）でその形が始まる。そのため、屋上に設けた防水層の寿命が短く、それを更新していくことを怠ると、躯体に少なからず損傷を与えることにつながる。

多くの日本家屋に見られるように、屋根勾配が自然な形で雨を建物の外へ流すやり方とは違い、防水に対する備えやメンテナンスが特に重要である。

別の見方をすれば、大正から昭和にかけて造られた鉄筋コンクリート造りのしんがり戦をどう戦うかが問われることになる―。街並みを構成する多様な要素の中で、最も重要なもののひとつが建物である。個性的で魅力あふれる街づくりのためには、建物の一つ一つがその街の歴史と文化を背景に上手に継がれ、そして息づいていくことが大切であろう。

その街固有の景観は一日たりともとどまることなく、時の移ろいを確実にその身に映しながら変化している。五臓円ビルは昭和の歴史とともに歩み、その年輪から醸し出されるえもいわれぬ情感がしっかり刻み込まれている。

そして、同時に智頭街道という街のほぼ中央に位置して、この街の活性化に向けての取り組みの中で、歴史、文化、芸術の街づくりに一役を担うことも期待され、市民、県民の重要な資産として次の世代へ継がれることを願うものである。

（木下建築研究所・木下正昭）